

令和3年度 学校評価自己評価書（豊山町立志水小学校）

経営理念	学校教育目標 … 力いっぱいがんばる子の育成 めざす児童像 … 進んで学ぶ子 仲よく助け合う子 元気でたくましい子 めざす教職員像 … 子どもを大切にする教職員 学び続ける教職員 協働する教職員
------	---

資料1

【評価基準】 4…十分達成できた、3…ほぼ達成できた、2…あまり達成できなかった、1…全く達成できなかった								
経営目標	重点目標	班	担当	具体的な取組	評価項目	項目別評価	達成状況	改善に向けて
○進んで学ぶ子（確かな学力）の育成	・学習習慣の確立と基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得 ・自己教育力を培う役割を担う学校図書館の活用	1	伊藤 辻 福重	① 授業や朝の学習タイムでの基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得の指導を工夫する。 ② 個に応じた家庭学習の習慣づけを行う。 ③ 漢字・計算コンクールを実施して、基礎学力の確認をし、個に応じた指導をする。 ④ 朝の読書や読書週間を通して、たくさんの本を読むように指導する。 ⑤ 調べ学習等で、図書室や学習室を活用した指導を行う。	① 授業や朝の学習タイムでの基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得の指導を工夫したか。 ② 個に応じた家庭学習の習慣づけができたか。 ③ 漢字・計算コンクールを実施して、基礎学力の確認をし、個に応じた指導を行ったか。 ④ 朝の読書や読書週間を通して、たくさんの本を読むように指導したか。 ⑤ 調べ学習等で、図書室や学習室を活用するように指導したか。	児童 ② 3. 2 ② 3. 2 ③ 3. 4 ④ 3. 2 ⑤ 2. 7 保護者 ② 2. 6 ①③ 3. 1 ④ 2. 6 教職員 ① 3. 1 ② 2. 8 ③ 3. 1 ④ 3. 4 ⑤ 2. 7	おおむね、基礎学力の定着に向けて、取り組めている。家庭学習については、児童は「進んで取り組むことができた」と回答しているが、教職員や保護者の家庭学習に対する評価は高くない。漢字・計算コンクールに向けて、多くの児童ががんばって取り組んでいることが分かる。教員間で、コンクールの位置づけにずれがあることが分かった。朝学習や読書週間を通して、たくさんの本を読むことはできている。一方で、分からないことがあったときに本で調べる、という活動があまりできていないと感じる。学習で図書室を利用した時間は、1年間で平均6. 3回であることからも、本を利用した学習は少ないことが分かる。 【参考】漢字コンクール8 0点以上 平均59. 8% 計算コンクール8 0点以上 平均53. 5% 多読賞※週1冊程度の貸し出し（1月末時点）約40%達成 授業での図書室利用回数 学習6. 36回 読書7. 64回 家庭学習アンケート「学習習慣」3. 3（+0. 38） ※9月と3月に実施「自己学習力」3. 1（+0. 34） 「自律心」3. 4（+0. 15） 「自己コントロール力」3. 3（+0. 25）	家庭学習でばっちりメニューやわくわくメニューに取り組むようになり、自分に合った学習方法を見つけられるようになったので、様々な学習方法を児童に伝えていきたい。コンクールの位置づけを「がんばって勉強したら賞がとれた」「勉強の成果が出た」と児童の自己肯定感を高めさせるものであると再確認していく。図書フォルダには、図書室の本で授業に関係する本の一覧表があるので、その表を確認しながら、本を使った調べ学習に取り組んでいきたい。
	・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ※「聴き合い、学び合う」活動 ※「つなぐ」「もどす」ことで対話をつくる教師の役割 ※自己選択のある授業	2	花谷 伊藤 鷺澤	① 学びの質を深めるような働きかけを教師が行う。 ② 「分からないから教えて」と言える学級作りを基盤に、考えを聴き合う場の設定をする。 ③ めあてに向かった児童の小さな気付きや発言等をクラス全体につないだり、前時までの学習とつないだりする授業の展開を行う。 ④ 単元を見通して自己選択をする場面をつくる。	① 学びの質を深めるような働きかけを教師が行うことができたか。 ② 分からないことを聴いたり、考えを伝え合ったりさせることができたか。 ③ 児童の気付きや発言等をクラス全体につないだり、前時までの学習をつないだりする授業を行うことができたか。 ④ 自己選択をする場面を指導過程に設定することができたか。	児童 ① 3. 1 ① 3. 1 ② 3. 3 保護者 ① 2. 4 教職員 ① 3. 1 ② 2. 9 ③ 2. 9 ④ 2. 6	「どうして」「なぜ」と教師が意識して言葉がけをしたり、タブレットの「ロイロノート」で考えを共有させたりして、自己の考えを深めさせる取組をした。学びの主体性を育むために、習熟の問題や問題数を自己選択させることを意識した教師が多かった。音楽や体育での発表の際に、楽器や技を話し合って選択させる事例もあった。「自ら進んで勉強しているか」の項目は、児童と保護者の間で評価が異なり、保護者の評価が低い。自己選択の場面を設定する評価は高くない。自己選択の場面を設定する授業を教師間で共有し、児童が自ら進んで学習ができるような教員の力量向上が求められる。	学校での学習から家庭でも学びたいと思うことを見つけ自ら意欲的に学習していけるように働きかけていく必要がある。児童が安心して分からないことを聞いたり、考えを伝え合ったりする環境をつくり、児童同士がコミュニケーションをとることができるように働きかけていきたい。児童の発言をつながられるような教師の言葉を蓄積し、教師間で共有していきたい。自己選択させることは、児童自身に自分の学びを振り返させ、さらに学ぶ意欲の向上につながるかと考えられるので、どのような学習活動で取り入れられるのか工夫する。簡単な自己選択の場面を設定することから児童の実態に合わせて無理なく進めていく。
	・タブレット端末の活用や体験活動の充実を支えた授業展開の工夫	3	佐藤 佐野 宮外 鷺澤	① 各教科の課題や目的に応じて、タブレット端末を適切に活用した授業を行う。 ② タブレット端末では得ることが難しい体験活動を充実させる。	① 各教科の課題や目的に応じて、タブレット端末を適切に活用した授業を行うことができたか。 ② 体験活動を充実させることができたか。	児童 ① 3. 6 ② 3. 7 保護者 ① 3. 2 教職員 ① 3. 1 ② 2. 8	教員の評価や記述回答から、どの教科でもタブレット端末を有効に活用した授業を行っていることが分かる。そして、児童の評価からも、学びやすさにつながっていることが読み取れる。図工の鑑賞や道徳や国語等での考えの共有での活用が効果的であったという職員の意見が多かった。しかし、今年度は授業参観を1時間しか行えず、保護者にその様子を伝えることができなかったため、保護者の評価は児童より低い。見たり、体験したりする活動は児童にとって確かな学びにつながっていることが読み取れる。算数の1㎢と1㎡を実際につ作って体感したり、伝統工芸の七宝焼きを体験したり、サツマイモを育て収穫し調理したりする活動は児童の実感を伴った学びにつながった。しかし、教職員の評価が低い。これは、コロナ禍のため体験活動に制限があったからだと考えられる。	児童の学びの様子をホームページなどで発信し、保護者に知らせていくことも大切である。今後も制限された中で実施できることを模索していく必要がある。
○仲よく助け合う子（豊かな心）の育成	・多面的・多角的に考えて議論する道徳科の充実 ※自我関与させる発問の工夫 ※道徳的成長を見取った評価	4	藤井大 角 土井	① 各教科や総合的な学習の時間、特別活動との関連を図りながら、主題の配列を工夫し、計画的に指導する。 ② 教材から感じたことや考えたことを文章でまとめ、話し合いにより異なる感じ方や考え方に接し、協働的に議論する活動を取り入れる。 ③ 問題解決的な学習を取り入れる。そこでは問題場面についての児童自身の考えの根拠を問う発問や、実際の自分に当てはめて考えることを促す発問等を工夫し、主体的に解決するための資質・能力を養う。 ④ 児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握するために、「道徳ファイル」を作成し、ワークシートや振り返りカードを綴る。	① 各教科や総合的な学習の時間、特別活動との関連を考慮して、道徳の授業を計画的に行うことができたか。 ② 児童が教材から感じたことや考えたことを文章にまとめることができたか。また、まとめたことをもとに話し合い、異なる感じ方や考え方に接し、自己の生き方についての考えを深めることができたか。 ③ 児童が問題場面を実際の自分に当てはめて考えることができたか。児童の道徳的判断力を高めることができたか。 ④ 道徳ファイルを活用して、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握し、指導に生かすことができたか。	児童 ② 3. 4 ③ 3. 4 ②③ 3. 1 教職員 ① 2. 9 ② 2. 7 ③ 2. 7 ④ 2. 5	他の教科との関連付けは、計画的に行った部分もあるが、行事などとの関連付けはコロナの影響で難しかった。児童自身の考えの根拠を問う発問や、実際の自分に当てはめて考えることを促す発問等を工夫した。自分の考えを書くことを継続したり、役割演技を取り入れたりすることで、自分の考えを表現できるようになってきた事例もある。しかし、課題としては、児童の振り返りの中には、教材から発展して自分事として考えられていないものもあることである。道徳ファイルを使用し、児童の考えの蓄積はきちんとしているが、変容を見取ることはなかなか難しい。	児童の発言をある程度予想した上で授業を展開し、児童の発言をさまざまな視点から考えられるようにできる教員の力量向上が求められる。そのための一つとして、道徳科の授業を公開し合う機会を設けたい。道徳科で考えたことを実生活に生かせるよう、教材を学ぶのではなく、教材をきっかけとし、自己を振り返らせるような発問等の工夫が必要である。同じようなテーマをどのタイミングで指導するのか、計画的に実施することが変容を見取る方法の一つだと考える。ワークシートを4項目に分類しながらファイリングし、学期ごとに蓄積したワークシートを見返して、今の自分と照らし合わせる時間も設定していきたい。
	・思いやりや感謝の心、自己有用感を育む児童主体の活動の実施 ※児童会活動や縦割り班活動の充実	5	辻 藤井大 廣下	① 「企画運営委員会」を中心に、異学年交流の全体集会を企画・運営し、縦のつながりが深まる活動を工夫する。 ② 他学年との交流を行う。 ③ 縦割り班を編成し、清掃や集会、読み聞かせ等の活動を行い高学年に役割をもたせる。 ④ 縦割り掃除の反省会では改善点を話し合うだけでなく、掃除を通してお互いを認め合う言葉を伝える活動を取り入れる。 ⑤ 「ありがとうの木」の活動を通して、感謝の気持ちをメッセージカードに書き、東西の昇降口に掲示する。	①② 集会や行事、縦割り班活動等を通して、異学年との心のつながりをもたせられたか。 ③ 集会や行事、縦割り班活動等を通して、児童の自己有用感を高めることができたか。 ④⑤ 日常生活や縦割り班の活動、「ありがとうの木」を通して、思いやりや感謝の心を育むことができたか。	児童 ①② 3. 4 ③⑤ 3. 2 ④ 2. 8 教職員 ①② 3. 4 ③⑤ 3. 0 ④ 3. 2	異学年との心のつながりについては、児童・教職員ともに3. 4の評価を得ており、コロナ禍だから実施しないではなく、できることを考えて実施した成果であると考える。年2回のなかよし集会では、学年の縦割りで2部制にしたり、縦割り班を2グループに分けたりして、活動を工夫することで異学年の交流を図ることができた。自己有用感を育むために、縦割り清掃の反省会でお互いのがんばりを認め合う活動を設けた。初めのうちは発表できなかった児童も高学年や他の児童が発表する姿を見て、自分のがんばったところを探して発表ができるようになり、周りから認められることで自己有用感が高まってきた。しかし、評価を見ると「あまり」「ぜんぜん」と答えた児童が4割おり、全体ではまだまだ伝える活動ができていないと感じる。	異学年と心のつながりを深めさせるために、今後も状況に応じて、計画を工夫した異学年交流を実施していきたい。縦割り活動だけでなく、児童会活動全体で児童主体の活動を工夫し充実させることで、自己有用感を高めさせていきたい。
	・気持ちのよいあいさつ、返事の励行 ・児童の心に寄り添った多様な教育相談活動の実施	6	藤井良 伏見 廣下	① 代表委員会のメンバーで『学校見守り隊』を結成し、月2回程度、挨拶運動を行う。また、『あいさつウィーク』を年3回設けて、意識的に挨拶をする期間を設ける。 ② 学校外で保護者や地域の方にも挨拶ができるよう、学級・学年で指導をする。 ③ 教職員は1人でも多くの児童の名前と顔を一致させ、児童の安心感を高めるとともに、いじめなどの問題が児童から訴えやすい環境を学校全体で作る。 ④ いじめに関するアンケートや教育相談、チャンス面談の実施やあのねボックスを設置する。児童の不安感や困り感を教職員が把握し、いじめや不登校を未然に防止するために活用していく。 ⑤ 担任は、1日の生活の中でクラスの児童全員と言葉のやり取りをする。担任以外は、あいさつ等を通して児童とコミュニケーションを取る。	①② 児童は、進んで挨拶・会釈をすることができたか。 ④ 児童が安心して学校生活を送ることができたか。 ③⑤ 毎日、児童とコミュニケーションを取ることができたか。	児童 ①② 3. 4 ③④⑤ 3. 4 保護者 ①② 3. 1 ③④⑤ 3. 3 教職員 ①② 3. 4 ③ 3. 4 ④ 3. 7 ⑤ 3. 5	あいさつについては、児童と保護者の間で評価の違いが大きい。あいさつウィーク実施時の児童の振り返りを見ても、「通学団の集合場所」「地域の人」の項目は、他と比べると自己評価が低い。特に、高学年の意識を高めることが大切だと考える。保護者も集合場所での様子を見ているからなのか、毎年児童の評価より低い結果になっている。教職員アンケート③3. 4とあるように、児童の名前と顔が一致するよう意識する職員が増えた。学年の職員間で様々な課題を共有したり、生徒指導担当等とも相談したりして、対応することができた。会議では、事例を挙げて話し合うケース会議を行い、自分の指導の参考になることができた。 【参考】あのねBOX利用者数18名（12/20現在） 教育相談アンケートを通してのSCとの面談数22名（2/10現在） 担任以外との面談数（4名） あいさつウィーク自己評価8 0％以上 1学期5 8％ 2学期5 7％	来年度は、アンケート項目を児童は「先生や友達」「地域」、保護者は「家庭」「地域」と分けることで、より詳しくあいさつに対する意識を確認したい。来年度は、児童の顔を覚えられるように写真を利用するなど、工夫したい。担任や学年だけで課題を抱え込まず、学校全体で対応するために、各種会議において具体的な対応策等を話し合う機会を設ける。
○元気でたくましい子（健やかな体）	・いじめ・不登校の未然防止と早期発見・早期対応							

